

平成21年度第1回三条市教育事務点検評価委員会会議録

1 開会宣言 平成21年7月7日(火) 午後1時30分

2 場 所 三条市役所栄庁舎2階201会議室

3 出席者 雲尾周委員長、村田洋子委員、若杉利行委員

4 説明のための出席者

松永教育長、池浦教育総務課長、小林学校教育課長、久住子育て支援課課長、
嘉代小中一貫教育推進室長、金子生涯学習課長、駒形教育総務課課長補佐、
藤井企画調整担当、阿部教育総務課庶務係長

5 傍聴人 なし

6 会議次第

(1) 開会

(2) 開会あいさつ

(3) 教育に関する事務の点検及び評価について

(4) 閉会

7 会議の経過及び結果

松永教育長から開会のあいさつあり

教育に関する事務の点検及び評価について

池浦教育総務課長、嘉代小中一貫教育推進室長、小林学校教育課長、久住子育て支援課
課長、金子生涯学習課長から平成20年度事後評価シートに基づき順次説明あり

(雲尾委員長)

それでは説明が終わりましたので、質問等がありましたらお願いします。質問は課ご
とでも、便宜上順番でもどこからでも構いません。

確認させていただきたいのは、市の行政評価済み項目が9個ありますが、これについ
ても同じように進めてよろしいということでしょうか。

(池浦教育総務課長)

はい、結構でございます。

(村田委員)

指標がみんな講座の回数や参加者の数とかで、私はこういうことはよくわかりません
が、指標ってどういうものかなと思います。例えば、学力向上のための子どもの取組で
は、すごく一生懸命やって全国平均よりも頑張っています。けれども目標値には達して
いないというのは、その数値だけを見ると確かにそうですけれど、この数値を乗せる以
外の指標の在り方について、教育長さんも最初に言われていましたが、とって私は代
案はないのですが、そういうところを少し考えていかないと、本当の中身というかが、
ただその数だけで言えないのではないかと思います。

それでこの中に、参加した人の満足度が非常に高かったという表現がありましたが、
そういう満足度や心の動きみたいなものが分かるようなものをどこかで取り上げ、指標

として掲げるようなことができればよいと思いました。感想ですが。

(池浦教育総務課長)

昨年からの教育に関する事務の点検及び評価について、当初からの課題の部分というものになるのかなという気がしています。いわゆる定量的に数で状況が分かるものについては分かりやすいのですが、今委員から御指摘のあった、いわゆる定性的な効果、満足度とか、それに対してどうかという部分が、事業の目的に合っているかどうかでできるだけ指標化されるようなもの、確かに御指摘の通りだと思っています。2年目ということで我々も少しは考えたつもりですが、今御指摘をいただければ、確かにそのとおりの部分もあるかと思えます。引き続き課題とさせていただきたいと思えますし、今回そういったものを、逆にこうした方がいいよということであれば、忌たなく御指摘いただく中で、来年度に反映させていきたいと思っています。

(雲尾委員長)

全般に、いわゆるインプット評価です。何をしたかという数値の評価が多いが、例えば1、2ページであれば第一指標も第二指標も同じようにインプットの評価です。総合評価ではアウトプットは多少書いてありますが、ただこのアウトプットは例えば総合評価の最初の文章でいうと「リーフレットの全戸配布を通して理解を得ることができた」と、理解を得ることができたとはどういうことでこれが説明できるのかというのは分からないです。リーフレットを配布しただけだと、読んだかどうかはさっぱり分からないということになりますので、まだなかなかアウトプットになりきれていないなということはあると思います。

それから村田委員が言われたように、アウトプットからアウトカムへの質的変容をどう測っていくかということとはなかなか難しいところがあります。何か所かでアンケートを取って参加者の満足度等々が出せるところもあるのではないかと思います。例えば、行政評価が済んでいる3、4ページの学力向上などでも、3ページの内容には「教員個々の資質（授業力・指導力）の向上を図る」とあるわけです。その指標が、学力テストだけで測られるものかどうかは、結局、これは確かにアウトプットですが、教員の実践的な授業力や指導力を直接的に測っているわけではないと。たまたまこれは子どもたちの学年の問題もありますから、偶然が作用する部分もあるわけです。先生方の授業力はすごく上がっているけれども、たまたまその学年が何らかの問題で余り成績がよくない学年だった場合というものがあります。そうすると、逆に単独で教員の指導力を図れるようなものが何かないだろうかということ、例えば研究開発事業で教材開発して新しいものができたとか、そういう共有化が図られたとか、何かそういうことが具体的に入ってくるともう少し、Cはやむを得ないかもしれませんが、第一指標や第二指標を見てもしょうがないというCではなく、それなりの努力が見えるような結果を考えてもいいのではないかなと、この辺りでは考えられると思います。

5、6ページの総合評価に書いてあるのは、教職員の5段階評価で4.4、子どもの評価では「とても楽しかった」と「楽しかった」の割合が93.1%と、こういう数値が出てきています。こういう数値がほかでも測られるといいのかなと思います。既に20年度

の話なので、今からアンケートを取るわけにはまいりませんが。

あと5、6ページで言えば、参加者と教職員の数値は出てきますが、例えば実際に刃物指導等をされている方の御意見はどうなっているのかなど。実際にされている方々が、この方々は毎年ずっと指導されているわけですから、子どもたちがどう変わったかは多分体感されていると思います。その方々の御意見や御感想等も聞いてはいかがかなと思います。

何か御質問等がありますか。

(若杉委員)

4ページの学力テストの偏差値は全国平均を基準にしていますが、体力テストは新潟県の平均を基準にしています。どちらかに合わせた方がいいような気がします。新潟県の体力が全体に良ければ全国順位的には上がってくるわけですが、全国学力を新潟県の平均では幾つですという指針があると分かりやすいような気もします。

(小林学校教育課長)

逆にそういう意見を言っていて大変ありがたいです。私も今回体力の方を全国平均にできればどんなにうれしいことかと思っていたのですが、2年前からこの数字が決まっていたもので、県が高いからと全国平均に変えるというわけにはいかないの、目標設定したもので合わせてやらせていただきました。確かに、高くはなっていると思います。ただ、新潟県の子ども全体から見ると低いところにいるという、戒めではないですが、更に頑張りたいという気持ちで今回はさせてもらいました。学力は全国、体力は県という指標の違いがあることもいかななものかと思しますので、統一できるものはないとは思っています。ただ、2年前に決めたときにこれでスタートしてみて、そこで頑張っているの、何とか体力もと思っています。

(池浦教育総務課長)

若杉委員の御指摘はごもっともでして、これは先ほどの市の行政評価の対象項目かどうかの視点で見させていただきますと、今御指摘になった食育・体力づくりの充実という項目については、教育委員会独自のものと見なしてもかまわないものがありますので、これについては委員の総意であれば全国という形で統一をさせていただければと思っていますが、いかがでしょうか。

(若杉委員)

全国という形であっても新潟県は全国でどれくらいの位置にあるかというのが分からないとまた、目標値が余りに大きすぎて、ランクが余り広すぎても分かりにくいような気がします。

(小林学校教育課長)

学力はNRT標準学力検査の全国統一モデルの比較はあるのですが、体力は県内の小1から中3までの細かい項目で比較することで当初指標を設定した経緯もありますが、数字でいうと、特定の小5、中2は全国と比べてどうかという指標もあり得ると思います。今の指標のままでは比べられないところもきっとあるだろうと思うので、もっと違う指標を立てていかなければ、見えてこないところもあるのではないかと思います。

(雲尾委員)

144 種目で全部比べるかどうかですね。無理に 144 やって数値を超えることを目標にするというのは、普通に考えると平均ですから半分は平均を超えないはずなので、ですから無理に三条がそういう目標を立てると、全部の市町村が平均を超える目標を立てるとどこも目標を達成できないということになってしまうという矛盾があると思います。

あと、その他に学力と体力の場合で、全国平均と県平均を変えると、おそらくは県平均では体格の違いが出ると思います。新潟県の子どもは比較的体格が大きいので、大体が大きいと数値が比較的体力が良くなるはずということがあります。そうすると身長で、中学生くらいになると例えば新潟県と秋田県が全国平均で高くなってきます。そういう子たちと 10 センチくらい体格が違う中で体力を比べると比較的有利に働くということもあって、新潟県全体に合わせて今までやってきたんだろうと思います。ただ、それでいくとちょっと厳しいかなと。あと、項目数が余りにも多いということで、それをすべて比較するというのも煩さであるということで、余りにも細かい項目を全部比べるよりは、比較項目数は少なくとも大まかな傾向が分かればということであると、全国に変えてもいいのではないかという話になると思います。

(小林学校教育課長)

大まかなものは、今言っていたようなものは出ます。

(村田委員)

すごく細かいことになりますが、各学校では、自分の学校の子どもの体力とかを見ながら一学校一取組をするわけです。だから前年度、あるいは現在のいろいろな比較の下で、学校は学校でそういう取組をしている、その小さな学校の一つ一つの取組みたいなものが成功したのかどうかということも、この総合評価の辺りで見っていくことも大事なのではないかと思います。それが全体の大きなものにつながってくるわけでしょうけれども。ですので、大きなこれに対して全体の平均がどうだったのかということと同時に、一つ一つの学校がそれぞれ持った取組を、それがクリアできたのかどうかという辺りを見っていくことも必要もあるのではないかと思います。

(雲尾委員長)

「今後の推進方法」には、「準備体操で弱点を取り入れた体操を継続的に」とあるわけですが、例えば、昨年度もこれをやっています。そうすると毎年同じことを書き続けているだけになってしまう。実際、数値が悪かったからといって改善の努力を各校はどうして、具体的にどうやっていて、それがどう活かされているのかは見えないということです。全国平均や全県平均と比べ続ける限りは、基本的には、それはずっと出てくると思います。やはり子どもたち自身の前年度の比較というようなことでないと、実際は分からないはずですが。当然、学年が上がれば数値は良くなるわけですが、三条全体で見たときに前年と比べてどうであったかが見えていないので、その年度年度の国や県と比べ続ける限りはそれがはっきりとは分からない、成果として上がったかどうか。実際、弱点を取り入れた体操等が、例えば各学校にしっかりと浸透しているのかどうか。ここが弱いということは分かったけれども、では、良くする準備体操は何があるのかを

各先生が必ずしも体育が得意な先生ばかりではないので、そういうところまできちんと伝わっているのかどうかです。

(松永教育長)

十分ご承知のとおりだと思いますが、今の一学校一取組というのは、例えばみんなでやれそうなものというのを種目として挙げて、体育、あるいは長距離走等で耐久力や持久力をつけましょうという取組はみんなです。ところが、上がってくる種目、例えばボール投げというものは非常に落ちている、新潟県でも落ちている。これらについて学校の取組となると、なかなか学校の取組としては取り上げられていない。中学校では部活動等もあるけれども、そういう競技、体育の授業などでも割合に取り上げにくいようなものが、新潟県も、あるいは三条市もそうだと思うんだけど、落ちている力が分かっている、学校としての取組はなかなか難しいという面があると思います。そういうところを、一体どういうふうの評価したり対応したりしていくのかということもまた大きな課題だろうと思います。そうしてくると、やはり前年度比等で調べていくか、あるいはトータルでこういう目標値を設定しないとなかなか自己評価ができないのではないかという気がしますので、非常に難しいところではないかと思います。

(若杉委員)

ただ、小学校の中を見ていると、大分運動は活発だし、体力も新潟県の平均を超えている人が何人いますという話が出てくるけれど、その割には目標に達せずC評価は厳しいなと思います。

(松永教育長)

確かにそうですね。

(村田委員)

私も、Cなんてそんな、頑張っていると思うんです。

(松永教育長)

確かに、だから目標値をどう設定するか、あるいはどんなところに観点を置くかを考えないと。

(雲尾委員長)

この指標は決していけないわけではありませんが、体力の指標となったときに、この体力テストの指標だけなのか、例えば体力テストは全国平均より低いけども、1日も休まない皆勤賞の子と、体力はすごくあるけれどやたら風邪をひく子がいたら、やっぱり親としては風邪をひかずに通ってくれる方がいいかなと思うわけです。そうすると、インフルエンザとかがはやるとどうしようもない部分もありますが、そういう意味では集団インフルエンザ以外での欠席率がある程度ない、という形の健康でという方が実際問題の体力としては必要なことだと思います。

(松永教育長)

体力というと、競技能力とちょっと違いますからね。

(若杉委員)

一番大事なのは、競技能力より体力の方が大事な気がします。

(雲尾委員長)

体育は好きだけど、例えば清掃活動は面倒くさいから手を抜くとか、そういうところも、例えば遊ばないけど、やるときはちゃんと角までほうきで掃くとか、雑巾掛けもきちんとはじっこまでやるという体力の方がもっと必要で、そういうときは面倒くさいとって動かないけども、運動だけ動くという形では体力の使い方としては余りよくないかなと思います。

本来は、体力を付けるというものは体育の授業だけでやるものではないはずですが。昨今、スクールバスが多くもなっていますが、毎日の通学であったりとか、休み時間の自分たちの遊びの中でつくる体力が本来的な体力なのでしょう。どうしてもこういう数値で測りだしてきますと、じゃ、マラソンをやろうという形で、特別なことで積み上げを図ると。それが施策としてはやりやすいでしょうが、子どもの生活としては日々の細かいところで一生懸命動くことが体力を付けることにつながる、そういう生活ではなくなってしまったことの現れかもしれません。

(松永教育長)

マスコミあたりや、文部科学省もそうなんでしょうけども、昭和 30 年代の子どもの競技能力は、例えば 50m 走にしてもあるいは跳躍するジャンプ力にしても、みんなそのときの数値よりも落ちている、段々下がってきているという危機感をどんどん募らせてきて、それで文部科学省は、体力テストをやってみて、回復するにはどうすればいいかという形で全国の体力テストというものが近年行われたわけです。そうしたら新潟県が意外に悪かったんです。それで新潟県はこれは大変だということで、各学校に 1 校 1 取組ということでやって、各学校に合った激励した。そうしたら、平成 20 年度の調査は新潟県は全国的に上位にきたわけです。それで県の教育委員会も非常に鼻高々な発言をしていたようですが、そういう、単に競技力や、あるいは数値で表せるようなものだけを今追いかけている、そういうところにマスコミも文部科学省もあるということです。私どもはそれに従った統計の報告をせざるを得ないということから、こういう数値が出てきているとご理解いただかなければ、今雲尾委員長が言われたように掃除の仕方や毎日の生活習慣というところに体力とどう結びつけるかという評価はなかなか、成果表の中では表すのは難しいのではないかという気がします。

(雲尾委員長)

少し関係ないですが、大学でも教員ばかりが階段を上がっていて、学生はみんなエレベーターを使っています。教員はもう皆健康に気を使う年になっていて、みんな一生懸命に階段で体力づくりをしているのですが、学生はたまにエレベーターの点検で階段が上がってくると、もう疲れた疲れたと、上がってきてもずっと言い続けています。

(松永教育長)

都会の子どもは、学校に通学するのにほとんど電車やバスを使っていて、駅の中を何 km も歩くような駅があるわけですから、相当歩く距離もあると思います。おそらく、この辺の子どもはすぐにスクールバスを出せといった場合に、果たしてそれが子どものためにいいのかどうか。安全安心という角度からいけば、それは非常に危険なことはたく

さんあるかもしれないけども、本当に子どもにとってそれがいいものなのかということも、やはり我々は地方にいる子どもらしい育て方をしてやらないといけないのではないかという気がします。

(雲尾委員長)

では仕切り直しまして、その他いかがでございましょうか。

(松永教育長)

少し話を戻して、全国的なものに数値を変えてもらってよろしいですか。標準学力検査は全国に出していますが、それは我々は目標値が達していないからCなんでしょう。

(小林学校教育課長)

はい。

(松永教育長)

体力も、県と比べたらCとなりますが、全国と比べるとBかもしれない。それは分からない。

(小林学校教育課長)

全国と比べれば高いところにいますので、AなりBなりいくと思います。

(池浦教育総務課長)

これは次回に全国も出してみてもう一度ご覧いただいて、それでいかがかと。

(松永教育長)

次のときでね。

(池浦教育総務課長)

例えば、県としてはこのとおりです、全国としてはこうだからBにしようということになるかもしれません。

(小林学校教育課長)

学力の場合は、今は全国でいっていますが、全国平均 50 が偏差値なのですが、私どもは 52. 幾つという極めて高い数値の目標を掲げています。それをクリアできなかったというもので、学力は全国平均を超えています。それは間違いないのですが、50 を目標にしているのではなく、高いところを見てCというのは甘んじてというか、三条の子に高い学力を付けさせたいという中で頑張っていることです。ただ、いろいろな意見を言っていた中でその指標だけでいいのか、国語、算数の数値だけというものではなく、ほかに御指摘いただいた、ほかのものの指標を加えた中で書かれるならば、それをあげていただきましたので、また課に一度持ち帰って、国語や算数以外の数値で書かれる指標があるならば、それを加えた中でできるならばそれをしてまた次回見ていただくということをお願いしたいと思います。

(若杉委員)

目標値というのは、どこから持ってきた目標値でしょうか。

(小林学校教育課長)

2年前に始まったときにこの数値を元に、それよりも年々少しずつ高いものという数値になったのではないかと思います。

(若杉委員)

雲尾委員長が言われたように、その年度その年度で大分違うと思います。

(池浦教育総務課長)

これは行政評価なので、少しでもPDC Aのサイクルを回す中で、その事業全体が指標を持って向上していくという結果を求めているわけです。少なくとも前年度より低い数値目標を持って努力するという姿勢にはならないので、どうしてもその時点での実績がある程度あれば、来年度はそれを当然クリアした中で、より良くするためにはどういう指標設定をしていくかという前提です。2年前に三条市の行政評価システムを始めた段階で、各課がそれぞれ現状を見た上で、ではどういうところに目標を置けば事業自体を推進できるかという視点でこの指標が設定されているというのが原則です。

(雲尾委員長)

ただNRTの場合、今は0.1ずつ上げていくわけです。これを10年かけていくと1上がるというのはものすごい大変な努力が必要になってきます。毎年度の0.1は十分そうに見えますが、10年20年続いたときには大変なことになります。そう考えると、ある程度の位置でNRTは上げる必要はなくなってきます。50ではなく52を目標にすること自体はいいと思うんです。50は本当は平均ですが、余り平均の学校は実はなくて、大概みな超えてしまうので、そうなってくると51か52を目標にして、それはそのままずっといった方がいいと思います。

それで、第一指標と第二指標とがあって、これは国語と算数で分けているわけですが、結局どちらも似たような数字で話をしています。国語が得意、算数が得意というのもあるので、多少この場合は算数の方がやや低く、国語の方がやや高くなっていますが、それで5も違うようなことはほとんどないので、通常大体1、2くらいの範囲におさまっています。そうすると合わせた指標がどちらかの指標の1つにして、もう1つは別の観点の指標を加えた方が、評価の多様性からいうといいではないかと思います。

(松永教育長)

それはいいですね。こっちは子どもの満足度や教師の取組など、いろいろな形が指標になると。

(小林学校教育課長)

取り組んだ事業は3つありますが、全くこれには触れないでなぜか指標になってくるところの指標だけが出てきていたので、ほかのところを聞いていると、皆さん取組に対する参加人数や満足度という中で言われているので、何かやった事業に対するものが1つ指標に上がってくると、それなりの成果というかやれたらと思うんです。

(若杉委員)

最近は特に理科離れと言われている中で、ものづくりの体験の参加とかは非常にいいわけですね。

(小林学校教育課長)

この土日にも科学教室があって、三条東高校で、同校の先生と他に二人の高校の先生、中学校の6、7人の先生、小学校の先生が、三十数人の小学校6年生に指導しましたが、

先生方もなかなか、高校の先生方が小学校の子どもに指導したり、中学校の先生が指導できない中で先生方も新たな発見というか、小さい子どもに教える喜びがあったり、子どもたちも専門家から教えてもらえるというのでとてもくいついて、食塩やホウ酸の溶け方や結晶の仕方の学習をしていました。とてもよかったなど、活動を聞いていてもそういうものがありました。

(村田委員)

10 ページの総合評価を読みますと、下から3行目に「心と学びの教育フォーラムはいじめ根絶スクール集会として全中学校区で開催され」とありますが、これは2つ重ねてやったということですか。別々にあったのではないのでしょうか。

(雲尾委員長)

こころと学びの教育フォーラムというものと、いじめ根絶スクール集会は同じものであると。

(小林学校教育課長)

同じではないですが、一緒にやった中学校区もあります。

(村田委員)

一緒にやったところもあるのですか。

(雲尾委員長)

一緒にやったところもあるとはこれでは読めないですね。このまま読むと、すべてが同時、兼ねているというような表現になります。

(村田委員)

こころも皆すごく努力しているけれども、Cなんですね。

(松永教育長)

不登校の数と、いじめの報告件数で残念ながら目標数値に達しなかったということでCとなります。

(若杉委員)

この辺も実績として人数で出てきますが、何%としては。やはり人数の方がいいんでしょうか。

(松永教育長)

そういう計算の仕方もあります。全国で小学校が不登校は0.何%とか、中学校は2.何%とかという、そういう数字の出し方もあります。不登校の発生率で、うちの三条は何%ですよという書き方もあります。

(雲尾委員長)

統計上は学校数も出ますが、小さい地域で新規ですと学校数になると特定されます。ここで何人というとな誰それというのをあまり出しませんが、全国で出すときはそういうふうにするのと要するに、いない学校もたまにあるということで分かります。そこまではしなくていいと思いますが、数字が減らないということではC評価になることはもっともです。いじめの定義が変わったということと、いじめを減らすことはなかなか、報告をどうするかでも変わってきます。

(若杉委員)

いじめというのは難しいですね。私の子どものころはほとんどいじめばかりだったような気がします、本人がそれをいじめと思うか思わないかの違いみたいなところがあるから。

(小林学校教育課長)

今、小学校で多いのが人間関係のトラブルといいましょうか、発達障がいの子どもが普通学級で自分の思いどおりにならないとすぐ手が出てしまったりということが、手が出た瞬間にいじめのカウントをしているところもあります。やはり少し前から見るよりは非常に小さなこととしては変ですが、積み重なっていじめとして上がってきています。なかなかそればかりではないですが、いろいろ多岐に亘ったことでのいじめが出ているとは感じています。

(若杉委員)

子ども同士が相手に無関心のような気がします。

(松永教育長)

これも、さっき雲尾委員長が言われたようなことで考えるならば、不登校の数といじめの数はこれはこれでいいけれど、もう1つ第三指標という形で本当にやっていることを学びのフォーラムやスクーリングサポートネットワークでこんな事業をしてこんな成果がありましたというものを成果表の形で出てくるなら、目標に達しなかったからCであったとしても、そういう努力したのはこんなところで人数が集まっていますよという形の何かも訴えたいなど。あなた方が頑張っているのは理解してもらいたいというのがあります。

(若杉委員)

漠然と評価してしまうと、では何をやっているんだというものがあります。

(村田委員)

サポート会議などはもってもらおうと絶対に変化して変わってくるので、そういう辺りの回数を重ねて増えてきていると書いてあるわけですが、その辺りをもう少し大きくアピールしたいですね。

(雲尾委員長)

どうしてもマイナスのことを書きがちですが、プラスのことを書いていただくことも必要であるということですね。直接的にはほかの事業でも行っていることになりませんが、結局やっぱりいじめをなくすといったときに、いじめをさせないために一番簡単なのは一人一人を全部分断させてしまって、人間関係がなくなればいじめは起きなくなります。しかし、それではいじめをなくすことだけが目標になって、多数の子と集まっていってもいじめが起きない状況というものは、例えばだれかが見張っているからいじめが起きないというわけではなく、人間関係がちゃんとできているからいじめができないとなると、人間関係づくりをすることがいじめをなくすことになるわけです。ですから、マイナスをなくそうとして、いじめをなくそうと働きかけるよりは、プラスを伸ばす、人間関係を上手に作っていくというプラスを伸ばすことによって結果的にいじめがな

くなるということに本来的には学校教育は行えるはずなんです。それをこのいじめ対応の充実という中にはなかなか書き込めないところがあると思いますが、関連事業としてはやはりそういうもので、きちんとした、子どもたちのコミュニケーション能力を高めつつあるんだよということが根本にないと、実際にはこういう対策をしていますといったときに、マイナス対応ばかりの対策ではなく、プラスを伸ばす対応をしているというのも説明できるようにしておいた方がいいのではないかと思います。

不登校は、この文章ですと中一ギャップ対応で小中一貫教育でうんぬんとは書かれています。それが主原因のようになっていて、直接的に今すぐどう対応するかということについては適応指導教室のことだけが書いてありますが、やはり原因別の対応やそういうところをどうちゃんと捕らえているかということの方が実際には気になるのではないかなど。確かに小中一貫教育は根本的な対応になるはずですが、現実では今 59 人の中学生がいるので、その子どもたちに今どう対応するかという時点でいうと、それをどうされているかがやはり気になるところではないかと思います。当事者の方にとっては。

それ以降はいかがでございましょうか。

(村田委員)

20 ページの読書の勧めということで、ブックスタートというものがどういうふうに着していくのかというものが本の貸出数で見られるという、その後のことが大事なのではないかなと思ったので、そういう見方をしてもらって良かったなと思いました。

(金子生涯学習課長)

昨年度、御指摘いただいて、新しく指標にしました。

(松永教育長)

例えばこういうものは、実績値が 52,000 といったら、来年度平成 21 年度は 52,000 を下回らない 51,500 というのでは困るという数字はやはり高いんだね。

(金子生涯学習課長)

これはあくまでもスタートラインは 19 年度で、4 年後を見通してまず数値を決めるわけです。その中で毎年度、4 年後に向けてどういう目標設定をするかで数値目標を各年度決めていきます。あくまでも 20 年度ですべて達成したとしても、やはり 4 年後に向かって 52,000 というのを継続していくという意味で、数値を変えないというのが基本的な点検評価のやり方なんだそうです。

(雲尾委員長)

ここには栄分館がまた伸びるという見込みですか。

(松永教育長)

伸びる要素はたくさんもっています。

(雲尾委員長)

ブックスタートそのものには、アンケートは付いていないですか。

(金子生涯学習課長)

付いていないです。

(雲尾委員長)

この本で良かったかとか、もっと別な本が良かったかとか、推薦する本はないかとか。そんなアンケートもどうせなら入れてもらえれば、郵送代が惜しければ図書館来館時にお渡しくださいという形のアンケートですと郵送料もかからないのでいいとは思いますが。

(金子生涯学習課長)

またアンケートの内容等、図書館と生涯学習課で考えまして、そのように形で進めたいと思いますのでよろしくをお願いします。

(村田委員)

90%までいっているわけですが、なかなか受け取らない人がいるわけですね。そういうのは難しいですね、みんなに配るといのは。

(金子生涯学習課長)

先ほどのアンケートも関係するのかもしれませんが、健康相談会というのがあって、その対象者が第一指標になるのですが、798人いらっしゃる。ここにまずおいでにならない方がいらっしゃいます。そうすると配布率が減ると。おいでにならない方に対して郵送で図書館に来てくださいと。送ったりしないでこっちに来てもらって、そこで、絵本というのは子どもたちとこういうふう読み聞かせをして、読書の習慣を身に付けてくださいというメッセージを伝えながら配布するんですけども、図書館に来ないというのがまず大きなことです。なので、先ほども申し上げましたが、今本館に来てくださいと言っているものを、栄分館と下田分館とお近くの分館でもよろしいですということ、21年度からは分館でも受け取れるような案内に改善させてもらっています。

(村田委員)

そういうふうを開いて、いろいろなところに分館が広がっていけばまた受け取る人も広がっていくわけですね。

(金子生涯学習課長)

そう思っています。

(村田委員)

そうですね。お考えはいいと思います。郵送して送りつけても、それは読むということにつながるのかがどうかがあります。思いを込めてやっている事業だから、良さを伝えながらということはずごく大事なことだと思います。

(金子生涯学習課長)

ここにも書いてあるのですが、図書館においでになる親御さんで、ブックスタートの本と袋、ブックスタートバックと呼んでいるのですが、それに入れてやってお上げしているのですが、結構そのバックを持っておいでになる方が見られるということで、それなりに定着しているのではないかという、これは司書の観察の項目をここに載せさせてもらっています。

(村田委員)

そういう観察はいいですね。すごく心に打たれるものがあると思います。

(若杉委員)

このブックスタート事業というものは三条だけでやっているのですか。大体よそでもみんなやっているのですか。

(金子生涯学習課長)

今、各市で取組をされています。子どもの読書ばなれというものが言われて久しくて、文部科学省自体、子どもの読書についての施策に力を入れている中で、幼児期からの読書週間ということでブックスタート事業というのは割と各市に広がって定着していると思います。

(雲尾委員長)

三条の場合はもう、本は決まっているのですか。

(金子生涯学習課長)

5種類ありまして、その中から2冊を選べる。例えば子どもが二人いて、上の子のときはこの絵本をもらったので、下の子のときはこの絵本というように選べるようにやっています。

(雲尾委員長)

5種類用意しているというのは、比較的多い方ではないかと思います。3種類とか2種類とか、もう決めているところもあります。

(松永教育長)

心ない親が中にはいるらしくて、ブックオフにそんなものが出ているよという発言がどこかでありました。

(金子生涯学習課長)

図書館協議会のときでした。

(松永教育長)

そんな話が出て、それこそ市が厳しい財政の中でも幼い子どもに読書の習慣を付けたいというので本を渡す。その親御さんがそういう扱いをされるのはちょっと、そんな市民がいるのかなと残念に思っているのもあるんですけどね。

(若杉委員)

出しても幾らにもならないでしょうにね。

(松永教育長)

もちろんそうです。

(村田委員)

何でもかんでも自分のところに届けて運んでくれてという、もらうものは当たり前で、自分からはちっともそれを探ろうとしないという風潮はありますね。子どもの中にもあるので、さっきもおっしゃったような、本当に人間関係の辺りに同じようなものがあるのかなと思います。

(若杉委員)

何をすることも、子どものことを考えたときにまず親が変わっていかなければ、子どもは変わらないですからね。

(雲尾委員長)

私は、本に書き込みをするのは好きではありませんが、例えば配布したときにマジックで、表紙を開いたところに何々ちゃんへ、というお子さんへのメッセージを書いてくださいということで書かせてしまえば、多分売らなくなると思うんですけどね。大事にお子さんと本を読んでくださいというふうにして、お子さんへのメッセージをそこに込めて書いてくださいという手もあると思います。どこまでやるかはそれは大変だと思います。すべての人が売っているというわけではないので。

その他はいかがでございましょうか。

昨年度は確か、A、B、Cの分かれ方のところで、目標値に比べて5%くらい変わるとAにするとかCにするとおっしゃっていたような記憶があるのですが、例えば31、32ページですと、第一指標が103.9%ですがAになるというのは、これはどういう形でAだという判断になるのですか。

(金子生涯学習課課長)

5%基準は共通の理解とは考えていなかったものです。上回ったということできせていただきました。

(雲尾委員長)

あと、44ページも103.1%と。ほぼという範囲でいったときに、プラスマイナス5%の範囲がほぼかと思っていたのですが、そういうわけでも必ずしもないという。どれくらいの範囲でAにいったいいいものかと。

(池浦教育総務課長)

前回、委員長さんから、1つの指標として5%という話が出たように記憶をしていますが、それを確約的なものというところまではしていなかったような関係がありまして、指標の達成率を見た中でということで、そのために今回は当該年度の目標達成率を入れたわけです。これを見て総合的に判断しようということで、その段階ではなっていたと思います。確かにこの課題については5%までいっていないのですが、いわゆる総合的な評価でA評価でいいのではないかという現課としての見解です。

(雲尾委員長)

別に原案に反対というわけではなく、説明上どうなのかということでお伺いしたところでは。

(松永教育長)

そうであれば、総合評価で触れて分かりやすくすればいいのではないかと。

(雲尾委員長)

指標が複数あると全体的に分かってもらえます。今のところは指標が1つだけなので、なかなか全体的なところが読み取りにくいところがあります。そういう観点であるという形でもう少し説明を詳しくしていただけるとよろしいかと思います。

(若杉委員)

39から42ページまでが文化財や遺跡の調査、保護。小項目には活用とありますが、活用というものが何も出ていないようですが。

(金子生涯学習課長)

活用は最後で、文化財を含めた文化遺産という表現になっています。ここで公開、活用を含んでいます。例えば事務事業に上げています文化財めぐりということで、市内の文化財を公開してもらってそこに見学に行く参加者等を指標としています。

先ほど御指摘された 41、42 ページは埋蔵文化財の発掘調査による保護ということで、それに対しても 46 ページの活用で触れていますけども、発掘調査は総合評価の中で、遺跡の発掘調査の速報巡回展というので、例えば出た土器や石器の展示会をやりまして、そこに来た人数等をここにカウントさせてもらっています。それがいわゆる活用です。

(雲尾委員長)

発掘調査はどなたがされていますか。

(金子生涯学習課長)

市の専門職員です。

(雲尾委員長)

職員だけで、ボランティアはいないんですか。

(金子生涯学習課長)

ボランティアはおりません。

(雲尾委員長)

野尻湖ですとボランティアを募集して掘っていますから、そうしたら人の手も余分になるかなと、市民の参加意識も高まるかなと思います。

(金子生涯学習課長)

雲尾委員長が言われたものは、いわゆる学術的な啓発のための発掘調査で、野尻湖等がその典型的なもので、野尻湖方式と言われた発掘調査ですが、私どもでやっている調査のほとんど 100%は、やむなくというか、開発に対応してそこが壊されるから調査をするという開発型の発掘調査で、そこには建設の年度や開発側の事情がありまして、なかなかそういったゆとりのあるボランティアの活用というのは難しいです。いわゆる業者に下請して発掘部分は入れてもらっています。

(雲尾委員長)

これは十何件やって、全部記録を残して終わりということですね。

(若杉委員)

八木鼻辺りの遺跡は日本で赤い塗料の原料か何かが出るそうです。日本で3か所しか出ていないとあって、歴史学者にとってはものすごい貴重な遺跡だけど、地元の人は何も知らないということもあって、こういうものが出ていますよということが、みんなが知ってもらおう機会等があったらいいのではないかなと思います。

(金子生涯学習課長)

先ほども申し上げましたが、45、46 ページの中でのシンポジウムというものを漢学の里でやらせてもらったり、あるいは下田公民館で発掘調査の成果展、巡回展と呼んでいますが、そういったものもやらせてもらって啓発等には努めているつもりです。しかし、

なかなかそこまで分からない方がいらっしゃるの事実だと思いますので、一層、発掘調査等の成果についてはきめ細かく巡回展、あるいは展示会、講演会などをした中で啓発していきたいと思っています。

(雲尾委員長)

例えば家庭教育講座や生涯学習課における学習機会の提供とか、そういうところでみんな受講者数を増やすというようなことだけが目標になっています。実際の指導者バンクのことはまた別立てで、IT指導者養成とかそういう特別なこととして2つは取り上げられていますが、やはりこういう講座で受講された人を、いかに次の講座の運営主体にするかとか、自主サークルを作っていくかという働きかけが、社会教育の中で最も重要なことと位置付けられているのに対して、どうも事業を見る限りは評価指標が受講者数ばかりになっていくと。そういう講座開催数のインプットだけでなく、受講者数のアウトプットだけでなく、その方々の中から自主サークルがどれだけできたかとか、翌年度の講座の運営スタッフに何人の人がなってくれたかとか、そういう形で市民の育成を図っていくことが中心になるわけです。それがどれだけ出てきたかは、講座の効果として高い。何百人受けてもみんな受けっぱなしよりは、何十人だけであってもその人たちが次の講座の主体になってくれる方がはるかに市民が育っているという観点が必要だと思います。そういう意味で、そういう指標を考えていただきたいし、例えば職員の方が講座の中で、次のスタッフやってみないという働きかけをしていくことをやっていかなければいけないのではないかなと思います。

新潟県は1つの公民館でも100人、200人と、多いところでは1つの課ごとに100人以上の企画委員がいます。職員1人と企画委員5人くらいで、一講座を作るという形でたくさん回していきます。そうすると、市民たちが自分が受けた講座の中であの講師よかったよね、また今度来てもらおうとか、あの先生の話はつまらなかったから呼ばないようにしようというふうにして、翌年度の講座の内容が結構ガラッと変わったりして、市民の声を取り入れられた講座が開催されたりします。

そういう形にさせていただいた方が、公民館職員も専門性を発揮できるのではないかなと。あるいは家庭教育講座でも、そういうふうにして前の経験をされた方が、例えばマタニティのお母さんが受けたとして、次はお子さんを産んで、母親の先輩として、次のこれから母親になる人の前で、私も去年不安だったけれど、今こうして子どもをちゃんと育てていますという形で出てくることによって、お母さん方の安心感は全然違います。そういうふうな形でのつながりができたり、そういう関係性を作っていくのがこの生涯学習の場だと思うので、そちらの観点も入れていただきたいと思います。

(村田委員)

講座を開設されているものについては、講座を何回やったかということもありますが、何人の人がそこに参加されたかも出ています。17ページの家庭教育講座の対象と、21ページの生活習慣定着のための講座は対象が違うのかもしれませんが、片一方は人数が出ていますし、片一方は回数が出ています。単発のものとそうでないものとの違いとかあるのでしょうか。21、22ページの方も、人数を挙げたらいいのではない

いかと思います。

そして21ページのところでは、私も現職でいたときに、教育長さんは校長会の度に、早寝早起き朝ごはんと読書と体を動かすことはとにかく大事なのだということを、三条市はそれを強調していきましょうとずっと言ってこられました。このことを本当に徹底させるのは、教育委員会サイドだけではなく他部局との連携がすごく大事なことだろうと思います。そこは大事なんだよと、そういう連携を取られていくとは書いてありますが、具体的な文言がないので、そこで付け加えるのか、それとも指標にそんなことは出しにくいんでしょうか、よそとの連携を図っていくということを表現できたらいいなと思いました。

(久住子育て支援課課長)

子育て支援課が作っているのですが、子どもの生活習慣定着の取組は市の行政評価にはない項目で、教育委員会独自で挙げた項目です。「学校での」と書きましたが、子育て支援課だけでなく学校の取組もある中で、非常に広い範囲で啓発といいますか定着の取組を様々な形でやっていますが、何を指標にしていいかが、子育て支援課であればというところでしか乗せられなかったというのが本当に実体です。それこそ学校でやる取組、生活習慣の定着というのはあいさつであり、早寝早起き朝ごはん、まだほかにもいろいろなことが生活習慣等にはあるでしょうけど、じゃ、それをどこまでやって、本当に実態では子どもがそういうことが実践できているという数値が上がれば結果が乗せられるんだと思うのですが、毎年アンケートをしているわけではなく、実際に子どもたちがどうだという、その子どもたちの年齢の幅とかもありますので、本当にどのような形でやっていいかということで、子育て支援課として周知をさせていただいたという回数を、どんな場でもということ載せたところです。

(村田委員)

こういうものはなかなか数値では出てこないものです。あいさつしたかしないかということに意味があるのかどうかもやはり疑問に思うところもあります。けれども、こういう行動みたいなものは全市挙げて行わないと意味がないというか、教育委員会サイドだけの問題ではない、もちろん学校だけの問題でもないわけです。他部局との関連みたいな、働きかけみたいなものを、これは教育委員会独自の調査で出てきたものと言われましたが、そういう辺りを総合評価でも今後のところでもいいですから、もう少しどんなふうを考えているのかを表現してもいいのではないかと思います。この講座を受けた人が一体何人いたのかという人数は挙げられるのではないかなど。それが多から少ないからと徹底がどうのこうのという問題ではないと思いますので、とても微妙な難しい問題だと思います。

(雲尾委員長)

生活習慣について言えば、例えば全国学力テストは学力テストに生活習慣がくっついてきますから、それで数値は上がってはくる。教育委員会には学校が全部きていますから、それを市全体で出したりすることはできます。ただ、要するに、子育て支援課の働きかけによって学校の子どもたちが朝ご飯をちゃんと食べたかどうかは、そこは直接的

なつながりはないので、傾向としてはこうですよということは出せるとは思います。各学校も学校評価でそれぞれに聞いたりしている部分があるから、それを独自に合わせればすぐに出せるとは思います。そういう点で行政評価といった場合に、自分のところでやったことではない結果をどれだけでもってきていいのかという面は難しいところがあります。教育委員会の行政評価の場合、結局、学校の実践を全部集めると、学校の実際の評価だけ教育委員会の評価にそれをいっていいのかという難しい問題があります。お隣の市でやったときは学校の姿勢ばかりがずらっと並んで、難しいですねという話をしていたんですが、こちらは非常に抑制的に自分のところの評価は自分のものだけでということやっていらっしゃるので、それで逆に見えないところも出てくる。そのところを、多分中間ぐらいの落としどころを探っていただいて、実際には例えば三条の子は朝ご飯をどれくらい食べているのかなとか、分かるだけでもある程度の数値としては出てくるかなとは思いますが、ただ、それは元々は目標としては立てていないわけですが、現状としてはこうであるということを出していただいてもいいのかなと思います。

(若杉委員)

食育推進室は、こういう細かい数値をいっぱい持っているのではないのでしょうか。朝ご飯とか。

(久住子育て支援課課長)

給食関係でやっているのですが、実際の啓発活動というのはなかなかやっていないということです。

(松永教育長)

学力学習状況調査には、先ほど雲尾委員長が言われたように、生活習慣調査もあります。私が見た範囲内では、三条市の子ども朝ご飯を食べてくるのは全国よりも高いという数値は出ています。ただ、三条市の子どもは生活習慣の上では、学習する習慣、勉強する時間が少ないというものが出てきています。私どもは、学力学習状況調査の結果の全市的な傾向というものを、学校教育課だけで押さえるのではなく、今、村田委員や雲尾委員長が言われたように、子育て支援課と、あるいはほかの部局とどうつなげてそれらを高めていくかは、今後の大きな仕事だろうと。それがこの中にどう出ていくかは別にしても、考えていく余地があるのではないかという気がします。

こういうことを学校教育課だけが持っているのではなく、実態として公表してもいい数値でないわけでしょう、学校の教科の点数と違って。

(雲尾委員長)

学校別でなければ。

(松永教育長)

例えば朝食の摂取は小学校は93%で、7%くらい食べてこない子どもはいますが、この辺はやはり問題がないわけではない。ほかにもいろいろ整理したのがあるわけでしょう。ただ、家に帰って勉強しない。テレビを見る時間が長かったり。

(雲尾委員長)

このほかにはありますか。会議時間が2時間を超えて、そろそろ集中力が途切れてい

るのではないかとと思いますが。

(池浦教育総務課長)

全体的には、前段で説明したとおり7月21日までに改めてご覧いただいて、更なる御指摘をいただければありがたいと思っています。そこで今言われた中で、単純に数値として人数が欲しいとか、あるいはもっとその辺は再考できませんかみたいな御指摘を頂いた部分で、今週できるところについては我々のところで差し替えをして、改めてそれでご覧いただいた方がいいのか、それも含めて改めて次回の第2回の点検評価という中でお願いしていいのか判断しかねているのですが、どうでしょうか。できる範囲で直した上で21日までご覧いただくような形を取った方がいいでしょうか。

(雲尾委員長)

21日といえば2週間後ですので、1週間程度で直していただいて、あとの1週間で見るとような形でよろしいでしょうか。

(池浦教育総務課長)

では、第2指標のないところに例えば人数を入れるとか、あるいは学力・体力の基準値を県で出すのか全国にするのかくらいはすぐ出せるところについては、シートの差し替えをさせていただいて、改めてそれでご覧いただくということにした方がよろしいですか。

(雲尾委員長)

そうですね。21日までの意見集約は変わりませんが、今回の会議を元にした修正資料について意見をすることということで、今週中くらいに御発送をいただけるということですので、それをもってご検討いただきたいと思います。

閉 会 午後3時37分